

【論考】

国際化のニューノーマルに向けての 中規模大学の取り組み

Tackling Globalization in the “New Normal” at a Middle-sized University

大阪学院大学 国際センター 派遣プログラムコーディネーター 畑中 みどり

大阪学院大学 国際センター 受入れプログラムコーディネーター・助教 孟 濤

HATANAKA Midori

(Outbound Program Coordinator, International Center, Osaka Gakuin University)

MENG Tao

(Inbound Program Coordinator & Assistant Professor, International Center, Osaka Gakuin University)

キーワード：グローバル人材、留学政策、オンライン活用、国際交流

1. はじめに

2020年は初旬より新型コロナウイルス感染が拡大、高等教育機関にとって試練の1年となった。そして、国際交流に関わる部署に所属する教職員もまた想像もしなかった状況に直面した。これまでは高等教育機関の国際化の中心とされていた国境を越えての学生の移動が完全に止まり、国際化や国際交流のあり方を新しい視点で考える必要に迫られた。この状況は日本に限ったことではなく、世界中が同じ状況に陥ったという点で2020年という年は今後も記憶に残る1年となることは間違いない。

そのような中で、大阪学院大学国際センターでは、完全に止まってしまった国際交流を国内にいながらどう進めていけるのかを考え、急速に進んだデジタル化を駆使して様々な取り組みを新たに開始した。新型コロナウイルスが蔓延する前からデジタル化に対応していた大学も多数あると思うが、本学のような中規模大学で、さらにリソースや財源が豊富ではない中で一から取り組むことは容易ではなかった。だからこそ、この取り組みが今後の日本の中規模大学の国際化のニューノーマルを進めていく上での事例として役立てばと思っている。

2. 取り組みの背景

そもそも新たな取り組みを始めようと考えた理由は、新型コロナウイルスの感染拡大がとどまる様

子もなく、これまで大学の国際化の中心にあった海外留学派遣と受入れを中止せざるをえなくなったからだ(図1)。過去5年間を見ても、毎年学生受入れと派遣を積極的に実施してきたが、2020年度はどちらもすべて実施することができなかった。



※実績には短期と長期の受入れと派遣人数を含む。

2020年の春の時点では秋学期に向けて準備を進めていたが、実施するか否かの決断が遅れると学生たちのモチベーションの低下につながりかねず、また学生たちが次へのステップに進むための時間が必要だと考え、2020年5月に夏期短期派遣プログラムと交換留学派遣の中止、そして受入れプログラムの日本語授業オンライン実施を決めた。そこからキャンパスの国際化を止めない、学生たちの留学へのモチベーションを低下させないために、大学が学内外、国内外に持つリソースを活用した取り組みを模索し、新型コロナウイルス感染拡大により教育現場で急速に利用が進んだオンラインを使って、これまでの枠を超えた国際センターができる取り組みを考え、実行に移した。見切り発車的なところは否めなかったが、開始が遅れるよりは、やりながら改善する方法を取った。以下が実際に取り組んだ事例である。

3. Non-Academic Programs 正課外活動

2020年度後期に実施したオンラインを使った正課外活動の取り組みは、留学から帰国した学生たちをメンターに開催した「留学カフェ」、グローバルに活躍する卒業生と在学生をつなぐ「留学×キャリア “OB・OG&U@ZOOM”」、留学生を支援する「E-Buddy」と「Team SOS」の3つである。

まず、「留学カフェ」は、この状況でも留学をあきらめてほしくないというところから実施した、すでに交換留学を終えた学生とこれから交換留学を希望している学生を結ぶオンラインイベントだ。実施の前には帰国学生たちとブレインストーミングセッションを実施し、どのような内容で実施するかについて学生目線での意見を取り入れた。交換留学帰国学生をメンターに迎えて全7回実施し、前編は留学についての基本的な質問に回答するQ&Aセッション、後編は交換留学制度の説明をすると共に地域別(アジア、ヨーロッパ、北米・オーストラリア)に分けて帰国学生が留学経験についてのプレゼンをしたり、具体的な留学に向けての質問に回答したりする形で進めた。今回のこのイベントに関

しては期待していたより参加学生数が少なかったが、それでも今後の留学PR活動の足がかりになった。また、参加した学生たちのフィードバックは肯定的なもので、特に後編は実際に留学に行った学生たちの生の声を聞くことができたため、参加者数も前編よりはるかに多かった。また、留学から帰国した学生たちにとっても、2020年は自分たちの留学体験を語る場が全くなかったため、オンラインであっても経験を共有できたことが良かったとのコメントがあった。

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY Be Global at OGU
「留学カフェ」～前編～
 ～交換留学帰国学生に聞く留学とは～

新型コロナウイルスの影響で2020年は海外派遣プログラムがすべて中止になりました。しかし、この状況はいつかは回復します。そのために、交換留学から帰国した先輩たちとオンラインで話をしませんか？お昼を食べながら、お茶を飲みながら、気軽に参加してください。

日時： 水曜日
 10月7日・10月21日・11月4日・11月18日
 12時50分から13時20分

ZOOM開催です！

行先はいろいろあるけど、行きたい大学ってどうやって決めるの？

何となく留学に行きたいと思う。でも何かから始めるべき？

そんな漠然としたあなたの質問にすべてお答えします！

英語を頑張ってるけど、手応えなし。どうしよう？

海外にはあまり興味ないけど、周りは留学は必要っていうよね。どうしよう？

申込みはこちら

主催：国際センター 問い合わせ先：inoffice@ogu.ac.jp

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY Be Global at OGU
「留学カフェ」～後編～
 ～交換留学帰国学生に聞く生の提携大学情報～

実際に交換留学に行くと、どの大学を目指すかを決めなければいけません。海外から帰国した先輩たちから、留学先の国、提携大学の様子、勉強の仕方などを聞きましょう。後編はエリアごとに分けての開催です。

ZOOM開催です！

Asia
 12月2日(水) 17時30分～19時
 今や日本よりグローバル化の進むアジア諸国。台湾、中国、韓国、タイで世界から集まる留学生と一緒に学びませんか。

Europe
 12月16日(水) 17時30分～19時
 日本人留学生が比較的少ないヨーロッパ諸国。現地の生活にどっぷり漬かれる。そして何より国境続きの国々に簡単に行ける利点あり。

North America/Oceania
 1月13日(水) 17時30分～19時
 今も人気のアメリカ、カナダ、オーストラリア。日本人が多いなかでいかに学びの機会を多くするかがポイント。

申込みはこちら

主催：国際センター 問い合わせ先：inoffice@ogu.ac.jp

次に「留学×キャリア OB・OG&U@ZOOM」。これは卒業生と在學生を結ぶオンラインイベントで、オンラインの利便性を活かして、海外や国内の様々な場所にいる卒業生と在學生を結んで実施した。本学は Facebook 上に「OGU Exchange Program Alumni」というグループページを作り、2007年からこれまで交換留学に参加した卒業生を繋ぐプラットフォームとして活用している（現在、交換留学を終了した在學生中の学生を含め 279 名が参加している）。これまでは大学側から一方的に情報を発信することが多かったが、今回初めてこのプラットフォームを最大限に活用して卒業生とコンタクトを取り、イベントへの協力を仰いだ。2020年度は後期に全6回実施をし、テーマに合わせてこちらから依頼した14名の卒業生が発表と質疑応答に協力してくれた（表1）。

表 1: 各回の詳細

回	日付	テーマ	卒業生
第1回	10月13日	留学とキャリア形成の関係	・(株)エストレリータ 代表取締役社長 鈴木信之氏（ゲスト） ・日系企業のドイツ支社長（駐在中）
第2回	10月31日	日系企業でグローバルに働く	・計測機器メーカー勤務 ・デジタルマーケティング企業勤務

第3回	11月14日	外資系企業で働く	<ul style="list-style-type: none"> ・半導体製造装置メーカー勤務 ・オンライン旅行会社勤務 ・機械メーカー勤務
第4回	11月28日	航空業界で働く	<ul style="list-style-type: none"> ・外資系航空会社 CA ・日系航空会社グランドスタッフ
第5回	12月5日	海外の大学院進学とキャリア	<ul style="list-style-type: none"> ・行政勤務 ・運送会社（自営）勤務 ・医療系会社勤務
第6回	1月23日	どこでも役立つ留学経験	<ul style="list-style-type: none"> ・ワイナリー経営（自営） ・ホテル勤務 ・コンサルテーション業務（自営）

毎回10名から20名の在学生の参加があり、実施後のアンケートでは、これまで交流のなかったグローバルに活躍する卒業生たちから直接話を聞く機会が得られたことについて非常に前向きなフィードバックがあり、回答した参加学生の97%がイベントの内容は役立ったと回答している。

最後にオンライン国際交流だ。まず、「E-Buddy」は、例年実施している海外から来日した交換留学生及び一般留学生をキャンパスでサポートするBuddy Programをオンライン化したものだ。2020年度は、海外の留学生との交流を望む約40名の在学生がプログラムに参加し、オンラインで定期的に留学生と交流している。また、短期研修で来日する学生たちをサポートする「Team SOS (Support Our Students)」は、2021年1月実施の短期プログラムもオンラインとなったため、今回はPBL(Project-Based Learning)を導入した。中国と台湾の提携大学の学生28名と在学生20名でグループを作り、2週間半に亘って「With コロナ」と「After コロナ」というテーマで協力してプレゼンテーションの準備をする形で実施した。参加学生たちは積極的にコミュニケーションを取り、オンラインでの発表もスムーズに実施することができた。

3. Academic Programs 正課活動

正課活動については、留学の機会を失った学生のための「Virtual Exchange (Cross Registration)」と、提携大学との連携で実施した「オンラインコラボ授業」を新たに取り入れた。

まず、「Virtual Exchange」だが、これは派遣が中止や延期となり留学することができなくなった学生が、派遣予定であった大学のオンライン授業と本学の授業を同時に受講するシステムである。オンラインで取得した単位は、既存の交換留学プログラムの単位認定制度に基づいて実際の留学と同様に認定し、本学の授業と合わせて1学期に24単位までを取得する仕組みだ。今年度は留学が中止になった2名がこのシステムを利用した。

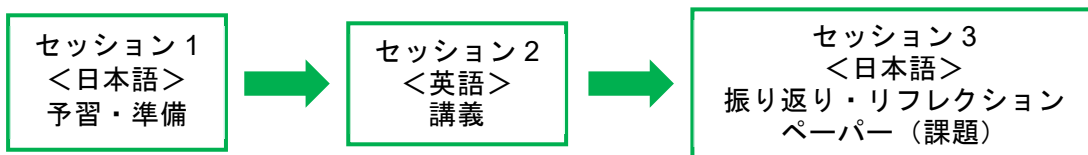
今回の一例を挙げると、タイのバンコク大学に留学予定だった学生は、バンコク大学の授業を3科目 (English for Everyday Communication, English for Business Training, English for Airline)、本学の授

業を4科目同時に履修した。若干の時差があり、慣れないオンラインでの受講だったが、日本にいな
がら海外の大学の授業を履修できたことで、自らの学びに対する姿勢が変わったとコメントしている。
また、現地の学生たちは、わからないことがあればすぐその場で教員に質問し解決していたことから、
オンラインであっても対面授業に近い形で授業が進められていたようだ。オンライン留学とはなった
が、実際の海外留学に近い経験ができたことがうかがえる。

次は、「オンラインコラボ授業」である。留学できない学生たちのために、日本にいな
がら海外の提携大学の授業を受講する機会を提供したいと考え、日ごろから良好な関係がある2校に依頼
をして実施した。そもそも留学が中止あるいは延期となった学生たちを対象に立ち上げたが、参加希
望学生が少なかったため、学部の教員に協力してもらい幅広く参加学生を募集した。また、英語授業
については、本学の受入れプログラムの日本語授業にオンラインで参加している交換留学生にも告知
し、中国の提携大学の学生たちが数名参加した。結果、延べ約20名の学生が参加した。

提携大学の1校目はオランダのフォンティス応用科学大学で、受入れ留学生担当教員2名に英語で
「異文化理解」と「グローバルシチズン」に関する講義をしてもらった。学生の英語力を考慮して、
単に英語での講義を受講するだけでなく、日本語で行う準備授業と振り返り授業を組み合わせ、学
生たちの理解度を確保するように努めた（図2）。

図2 オランダの提携大学とのコラボ授業の流れ



オンラインコラボ授業の様子

その結果、1回目の授業ではなかなか発言できなかった学生たちが、2回目の授業ではつたない英語
でも自分の意見を発表しようとする意欲的な姿勢が見えた。学生たちのリフレクションペーパーから
は、英語での講義を理解するのは難しかったが、授業を通して異文化理解の大切さ、新型コロナウイル
スに影響された現状の中でどのようにグローバルな視点を身につけることができるのかなど、気づ
くことが多かったことが読み取れた。

2校目は中国の広東海洋大学で、先方の日本語学科の教員が担当する授業に参加する形で実施した。
事前に授業内容を確認した上で準備し、先方の学生たちとのディスカッションに参加した。この授業

は2回ともすべて日本語で実施されたが、現地学生とのディスカッションの時間を設けたため、参加した本学の学生たちは日本にいながら海外の授業に参加し、現地の学生たちと直接話げできたことで、非常に満足度が高く、振り返りのレポートでも前向きなコメントが多かった。また、先方の日本語学科の学生たち約30名も、実際に日本人の学生たちと話をすることができたため、機会があればまた参加したいとコメントしてくれた。

2つの異なるタイプのコラボ授業を実施したことで、双方の良い点や改善すべき点が確認でき、初めてのコラボ授業は今後に繋がるものとなった。2020年度は上述のような取り組みにより、提携大学との連携も幅が広がり、オンラインを使うことで時差の壁を超え、場所を超え、連携する方法を見つけることができたので、これは大きな収穫だった。

4. 今後の取り組み

2020年度を振り返ると、大変な1年ではあったが、同時にオンラインにより様々な取り組みが実施できることがわかった。そのため、感染拡大が終息したとしても2021年度以降も同様の取り組みを続けていく予定にしている。その中でさらに発展した取り組みに移行する予定のものが以下の3つである。

一つ目は、卒業生とのオンライン交流イベントだ。今年度も実施途中から学生に司会進行を任せて実施する形に変更したが、来年度以降は学生の企画、運営で実施していくことを考えている。それにより、学生たちは将来社会に出た時に役立つ、自主性、積極性、創造性などのソフトスキルを身につけることができ、それがさらに就職活動においてもアピールポイントになればと思っている。また、今回、交換留学を経験した卒業生たちと話をする機会ができ、様々な分野で活躍している卒業生が多数いることを再認識できた。オンラインイベントは人がいる場所に縛られないというメリットがあるが、対面で直接話げしたいという学生も多数いるため、このイベントを継続するに当たって、ハイブリッドでの開催なども検討していきたい。さらに、今後はこのイベントのみならず、卒業生が授業やその他のイベントに参加できるように、学内の他部署や教員と卒業生を積極的につなげていきたいと考えている。

二つ目はVirtual Exchangeだ。今回のように留学の機会を失った学生たちのためのものだけでなく、これまで財政面や家庭の事情、カリキュラムとの関係上などで長期留学が難しかった学生に新しい選択肢として提供できるようにしていきたいと考えている。海外の提携大学とさらに連携を深め、新しい海外留学生制度「Virtual Exchange Program」の構築を目指す。これが実現すれば、多くの学生たちが日本にいながら海外留学体験に近い経験をすることができるようになり、さらに大学の国際化を進めることができるであろう。

最後に、提携大学とのオンラインコラボ授業である。今年度は計画から実施まであまり時間がなか

ったため、受講した学生たちに単位を付与することができなかったが、モチベーションの高い学生たちは、単位がなくても一生懸命取り組んでいた。そのような学びに積極的な学生たちのニーズに応えるため、学部の授業に組み込むなど、単位を付与できるような仕組みも検討している。これが実現すれば今年度より回数を増やし、異文化理解を軸により幅広い内容を提供できるように検討している。

5. まとめ

2020年度に国際センターが直面した事態は大変なことではあったが、ピンチはチャンスをもたらすことも事実である。今振り返ると、2020年度取り組んだことが、これまで実行不可能だったかという点を決してそんなことはない。国際化を考える時に学生たちが国を越えて移動することに大きな比重が置かれていたため、オンラインを使って何かをするという考えに至らなかっただけである。そのため、2020年度は大学の国際化の新しいページを開いたと言えるのではないだろうか。今後は“学生の学びを止めない”から“よりよい高等教育機会を創る”へと思考をシフトし、より多様な学びの機会、成長の機会を与えられる取り組みを継続していきたい。

2020年にすべての学生派遣が中止になったことで、大学の国際化をもう一度考えてみた。これまでいかに多くの学生を海外に派遣するかに焦点を当てて取り組んできたが、実際は大学のキャンパスにいる多くの学生はそのようなチャンスを得ることなく4年間を終えていく。しかし、新型コロナウイルスが私たちに教えてくれたことは、色々な意味で世界は繋がっているということだ。デジタル化が進めば、海外に出なくても世界と繋がり、世界の人たちと一緒に何かをする機会がさらに増えてくると考えられる。その時に、異なる視点を持つ人々を受入れ、異なる考え方を理解する姿勢を持つことは避けて通ることはできない。そして、それは経験から学ぶものでもある。今後はキャンパスワイドで既存の学部授業の中に異文化理解の視点を入れて行う国際共修を進めていくことにより、より多くの学生たちが日本にいながら、広い視点を持つことができ、グローバル社会で役立つ人材へと成長できると考えている。

また、今回の様々な取り組みを通してオンラインを使うことでほとんどの国際交流ができることが分かった。今後も国際交流プログラムを実施するに当たり、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッドプログラムの実施を模索していきたいと考えている。実際に海外で過ごす経験に勝るものはないが、それができなくなったことによって国際交流は新たな局面を迎えた。ニューノーマルにおいては、実際の学生の国境を越えた移動を超える、国際化における新たな可能性を見出すことが重要である。そのためにはさらに学内外、国内外のネットワークとの連携を強めていく必要がある。

国内の大学で本学とのコラボレーションを模索していきたいと思われる大学があれば、ぜひ声をかけていただきたい。共に国際化のニューノーマルを推進していければと思っている。

大阪学院大学国際センター Email: inoffice@ogu.ac.jp